

未来へ繋ぐ心の声

高三

私は昔、父と国立ハンセン病資料館を訪れたことがあります。そのときは病気によつてこんなにも人権をおびやかされていいものかと、言葉に表せないモヤモヤとした感情が心に広がったことを覚えています。

今回人権作文を書くにあたって、より深く内容を理解したいと思い、先日、再び国立ハンセン病資料館へと足を運びました。

資料館に入り、まず目にしたのは過去の新聞の記事や写真でした。そこには、ハンセン病に対する偏見や差別と闘った患者の皆さんの声や裁判について、国立ハンセン病資料館が設立されるまでの取り組みなど、さまざまな資料が置かれていました。そこで驚いたのは、日本ではハンセン病患者の方が九十年近くも隔離されていたことです。これは日本のみで、個人個人の偏見や差別だけでなく、国が招いた差別なのだと思い、憤りを感じました。更に奥へ進み、階段を上ると、参考資料

が大きく書かれたブースや展示空間がありました。ハンセン病患者の皆さんが作り出した陶芸品や写真、刺繍アートなど、本当にたくさんものを観覧することができました。「すごく綺麗」と思う一方で、この作品を作る背景を思うと、心苦しさも感じられました。また、展示品では胸が締め付けられる物も数多く目にしました。療養所では、想像がつかないほど酷く劣悪な環境での生活を強いられていました。夏はとても暑く、冬は氷点下となるほどの狭い部屋にたくさんの方が寝ていて、早く治して帰ろうと願っていても、死ぬまで出られない絶望感に包まれていたのです。

展示品を見て、改めて差別や偏見がハンセン病患者の皆さんを苦しめ、いかに人権が侵害されたのかを痛感しました。

ハンセン病患者の皆さんが経験した苦しみや絶望は、決して過去の話だけではありません。私たちの社会には、今もなお、偏見や差別が根強く残っている場面があります。例えば、見た目や出身地、職業などによる偏見は、無意識のうちに人権を侵害していることもあります。私たち一人一人が、そのことに気付き、行動を変えることが必

要だと強く感じました。

私たちは、差別や偏見に立ち向かい、誰もが尊重される社会を創るために、何ができるのかを考え続ける必要があると思います。

まず、私たちにできることは、正しい知識をもつことです。誤った情報や偏見に基づく差別は、無知から生まれることが多いためです。歴史や現代の人権問題について学び、理解を深めることが、偏見をなくす第一歩だと私は思います。

しかし、それだけではまだ足りないと感じます。私たち一人一人が、身近な人や社会の中で差別や偏見に気付き、それに対して声を上げる勇氣も必要です。小さな行動や言葉の積み重ねが、やがて大きな変化をもたらすと信じています。その上で、何よりも大切なのは、やはり、誰もが尊重される社会を創ることです。過去の悲しい歴史を繰り返さないために、私たち一人一人が意識をもち続け、未来に向かって歩んでいくことが求められていると考えました。私は、今回、国立ハンセン病資料館に行つて学んだことを忘れず、差別や偏見と闘う心をもち続けたいと思います。

ハンセン病患者の皆さんが失ったものは計り知

れないほど多くあり、今もなお、取り戻せていないものがあります。「家族との絆」「社会との共生」「入所前の生活」「人生の選択肢」どれも取り戻すのは容易ではありませんし、修復不可能なものもあります。しかし、十七歳の私が今できることは少なからずあるのではないかと思います。どんなことも偏見や一部の意見から物事を判断せずに、その物事の核心に触れることを大切にしていきたいです。そして、ハンセン病患者・元患者の皆さんのこれからが幸せであることを切に願います。